

高村光太郎におけるアメリカ

Takamura Kōtaro and His America

—An Art Student as a JAP and An American Sculptor

Gutzon Borglum—

瀧 沼 誠 二*

Abstract

Takamura Kōtaro, one of the most distinguished poets in the modern literary history in Japan, has been discussed from many points of view. It is a common approach for exploring the reality of the poet who took the initiative in singing “Ego and Self in Modernity of peculiar atmosphere in peculiar country” through his personal experiences abroad, especially his encounters in London and Paris.

Though several fruitful contributions to an understanding of this great poet have appeared in the last two or three decades, it is often impossible to discover any commentaries on his life in the United States.

The aim of this paper is twofold: to indicate how Takamura Kōtaro lived in New York and indicate a more comprehensive view for touching the heart of his poems.

※ Katanuma, Seiji [現職] 北海道教育大学助教授

At the same time, I focus on the relationship between a Jap art student Kōtaro and an American sculptor Gutzon Borglum in this study and try to broaden the horizons of the disputes over this poet.

[1]

高村光太郎の詩集『道程』に、「根付の国」と題する奇異な詩がある。米・英・仏の3年有余にわたる遊学生活を終えて帰国した翌年、即ち明治43年(1910)12月に書かれたもので、もともとは『第2敗鬪録』の総題で、明治44年(1911)『スバル』に発表された5編のうちの1つであった。

たった1つの主題である日本人を、彫塑を制作するように彫刻鑿を駆使した方法で詩ったこの作品については、既にさまざまに論及されている。まず、その詩を紹介してみよう。

「根付の国」

頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で
名人三五郎の彫った根付ねつけの様な顔をして
魂をぬかれた様にぼかんとして
自分を知らない、こせこせした
命のやすい
見栄坊な
小さく固まって、細まり返った
猿の様な 狐の様な ももんがあの様な
だぼはぜの様な 麦魚の様な 鬼瓦の様な
茶碗のかけらの様な日本人

この詩に対する代表的な見解は、次のごときものであろう。

この作品にはヨーロッパでやされた異質の精神がはたらいている。これは日本と日本人とを、外側からみたナマの感想である。昔からの生活伝承にとらわれている人々への嘲笑であり、重くなるしい環境へのにくしみであり、それらのいっさいを含めた意味での日本的風土の否定である。⁽¹⁾

あるいはまた

この詩で歌われている日本人ならびに日本的なものへの嫌悪感、人種コンプレックスや東洋と西洋の文化的落差を感じた彼のヨーロッパ体験を反映している。⁽²⁾

とする批評——これらは、詩的主題をあやまりなく捕捉はしていると、私は思う。しかしなぜ、一様に、高村光太郎のヨーロッパ体験のみを強調するのだろうか。

このような高村光太郎研究における一種のかたよりは驚くにあたらない。ここに挙げた例にとどまらず、高村光太郎における西洋は屢々論ぜられるが、⁽³⁾概して高村光太郎におけるアメリカについて論ぜられることは少ないからである。

光太郎の外国生活は、明治39年（1906）3月から明治40年（1907）5月までの1年2ヶ月をアメリカで過し、同年同月から明治41年（1908）6月までの1年1ヶ月をイギリスで、同年同月から明治42年（1909）6月までの1年間をフランスで過したことになる。⁽⁴⁾これによれば、彼の遊学生活は、アメリカにおいてもっとも長かったのである。短期であったとはいえ、彼のフランス体験は、重要であったことはいままでのない。しかし、だからと言って彼のアメリカ体験を看過してもよいとは思わない。

私は、以下において、彼のアメリカ体験をできるだけアメリカ側の資料によって明らかにし、帰国早々なぜ彼が「根付の国」のような特異な詩をうたわなければならなかったのかを明らかにしてみたいと思う。

〔2〕

〈ヴァンクーバーから大陸横断のプルマンカーで東に向ひ、ロッキー山を経て、モンリオールから国境を越えてニューヨークの中央停車場に⁽⁵⁾到着した高村光太郎は、くともかくも紐育市第5街のずっと上の方の西千何番かの小さな素人下宿に落ちつき、それから毎日見物と職さがしとに忙がし⁽⁶⁾かったが、父光雲からもらった千弗に相当する2,000円がだんだんと減って行き、父の友人岩村透からの紹介状もなんの役にも立たないと知ったとき、彼は、〈スクールボーイの職をいろいろ見つけようとしたが、どうしてもないので、最後には皿洗ひか鉄道工夫をやらうと決意した⁽⁷⁾〉という。

スクールボーイ、あるいは皿洗ひか鉄道工夫をやらうとした高村光太郎が、他の留学体験をもつ森鷗外や夏目漱石とまったく異質の海外体験をしたであろうことは言うまでもないが、あの決意を生み出した、高村光太郎のアメリカとはどんなものであったのかを、まず明らかにしてみたい。

高村光太郎が見つけようとしたスクールボーイとは、いったいどのようなものだったのだろうか。次のような記述が参考になるかもしれない。

スクールボーイという表現のはじまりは80年代初頭にまでさかのぼることができる。この荣誉ある創始は、カリフォルニア州バーモントにある男子寄宿学校の経営者、故レイド夫人によっている。

彼女は上述した学校の寄宿生の資格で日本人の若者をその学校で働かせ、同時に下宿しながら授業に出る機会を与えた。(中略) 1910年には、サンフランシスコの日本人スクールボーイだけで500人を数え、部屋代を払わずに、4・5時間働いて1ヶ月10ドルから15ドルの収入を得ていた。⁽⁸⁾(論者訳)

しかしながら、高村光太郎の場合、スクールボーイとは、このような平板な説明以上のものがあつた。高村光太郎のニューヨークにおける意識—それは生活意識とでも呼ぶべきものであるが—は、次のような記述を読むと、まったく別な高村光太郎の実像が、きわめてリアルに浮び上がってくる。

日本人移民が、船からまっすぐに農園労働仲間に加わったり、鉄道の保線工夫班に入ったりしない場合は、たいてい“スクールボーイ”になるのがふつうだった。⁽⁹⁾

このような記述は、たとえば、高村光太郎の自我の覚醒が渡米以前であったか渡米以後であったのかとする真摯ではあるが観念的な議論に歯止めをかけ、高村光太郎の現実に肉迫するよう誘掖している。大胆に私の仮説を提示しよう。高村光太郎の、ニューヨークでの生活において、日本人移民と同じ意識を持って暮らしていたのではないかということである。このような仮説の構築が、多少奇異に受けとめられすぎるのであれば、次のように言い換えてもよい。当時のアメリカは、美術学生の高村光太郎を日本人移民同様の状況に追いこんでしまったのではないだろうか、と。

ビル・ホソカワの〈多くのものはホテルや料理店の仕事を見つけ、まず最初は給仕や皿洗いになった⁽¹²⁾〉という記述を読むとき、私が実感するのは、高村光太郎はまぎれもなく、日本人移民がアメリカ社会で生きのびるための所定のコースともいべきものを辿っていたことが理解できるのである。しかし、それにしても〈鉄道工夫をやろうと〉したという光太郎の言は、いかにも唐突すぎる。おそらく美術学生で、後に詩人として近代文学に名をとどめ、彫刻家としてすぐれた作品を残したという、彼の芸術家としての側面から、若き日のこの事実を考えても、なかなか理解し難いのではないかと思う。われわれは、しかしながら、この詩人の若き時代の、特に外国におけるこのような心情の軌跡を軽く見るわけにはいかない。実は、〈鉄道工夫〉になろうとしたこと自体が、彼が日本人移民であったことを露呈している。この点に関して、アメリカ側の資料を見てみよう。

1900（明治33）年に、オレゴン鉄道船舶会社には、日本人鉄道工夫が313人、サンタフェ鉄道には、347人のアジア人が働いており、また〈南太平洋鉄道の建設部門には、かなりの数の労働者が雇われており、その階層の多くは、中国人および日本人であって、その数は1,000人ないし1,500人前後と推定さ

れている¹³（論者訳）という。そして、これらの日本人鉄道工夫は、いずれも1日95セントから1ドルの日給で¹⁴使われ、1898（明治31）年から、1908（明治41）年までの10年間に、シアトルに本拠地を置く「東洋貿易会社」1社だけで15,000人の日本人鉄道労働者を供給した¹⁵という。

“Japanese American History Project”¹⁶によると光太郎がニューヨークで生活していた頃、そこには1,240人の日本人移民がいたことがわかる。ここいらあたりで、高村光太郎自身のニューヨーク生活の生の声を聞いてみよう。高村光太郎は、高見順との対談で、次のように述べている。

高見 アメリカへ一番先にいらしゃったのは、どういう興味があたりになつたんですか。

高村 興味じゃないんですよ。経済の関係で、ほかの国へ行つたって金取れないでしょ。金取らなきゃ生活できない。みんな、ぼくがおやじの金で裕福に向うを歩いてたんだと、誰でも思ってるんですがね、初め2,000円もらっただけで、あとは自分でかせいでやれっていうんですよ。

このような高村光太郎のことばを聞くと、官費留学生などとは異なつた意識で、つまり彼の视界に勉学の具体的目標を捉えながら、一方では生活の現実に、その视界そのものが揺さぶられているといったていの、いわば振幅度の高い意識で、アメリカに渡り、ニューヨークで暮らしていたということになる。つまり彼は、1,240人の中の1人として、ががつと飢えて、アメリカ社会の底辺を生きていたのである。

彼が日本人移民と同様の意識を持っていたあるいは、それと同様の状況に追いこまれたことを明示する彼自身の肉声が、もう1つある。上述した高見順との対談で、高村光太郎は、

その前（論者注・日露戦争前）は排日があつたんです。サンフランシスコなのでね。

と述べている。あるいは、

ジャップなんていってバカにされると、すぐアメリカ人と喧嘩してね。とも述べる。われわれは、彼が過した明治39年(1906)および明治40年(1907)頃のアメリカ社会を、浮彫りにしてみる必要があると思う。

時代は遡るが、日本人移民の生活実態を探るために『移民契約書』¹⁷⁾を見てみよう。

1ヶ月 本人 12ドル50セント 妻 10ドル

共ニ子2人マデハ1人ニ付1ヶ月1ドル宛食料トシテ給与

ブランケットハ自弁

毎月26日

毎日12時間 農夫1箇月ノ労働ト為スヘシ

時間外1時間12セント 妻8セント

これによって光太郎の述べる〈金取らなきゃ生活できない〉その生活のありようを伺い知ることができるが、高村光太郎が渡米した明治39年(1906)頃の日本人移民の実数を紹介してみよう。

明治34 5,249人

明治35 14,455人

明治36 20,041人

明治37 14,382人

明治38 30,842人

明治39 16,418人

とおよそ101,000余人を数えることができる。¹⁸⁾私があえてこのような資料を引用するのは、いわれのないことではない。高村光太郎が、これらの移民の感情を共有していたことを明らかにするためであって、これらの人々と同様の感情を共有していたからこそ、サンフランシスコの排日を鋭く受け止めたのである。たしかに、高村光太郎がアメリカに着いた明治39年(1906)には、次のような出来事が起っている。

サンフランシスコ教育委員会は、日本人子弟を公立学校に通学させることを禁止し、チャイナタウンの東洋人学校へ隔離することを決議している。排日の原因は、次のような現地の新聞の論調によっておおよそ理解できよう。

合衆国の契約労働法は、2、3週間ごとに日本人によって侵犯されている。国は安価な日本人労働者によって満たされており、褐色の小男どもが、制限法の議会で成立する以前の中国人よりも、もっと多数わが国に流れこんでいる。〈中略〉どの点から見ても、合衆国移民官はその義務を怠っており、さらに悪いことに、アメリカ市民ともあろうものが、1人あたり40セントか50セントで1日12時間も14時間も働いて平気な安い日本人労働者を雇用していることである。¹⁹⁾ (論者訳)

このいらだった感情の底流には、既に1882(明治15)年に成立している中国人排斥法を意識しながら、その排斥感情を安価な労働力である日本人へと向けているといった、黄色人種へのぬきがたい偏見があったことは言うまでもない。このような偏見の実体は、次のような記述がよく伝えている。

外国人でしかも市民権資格のない1世、その子供でアメリカ生れの2世、これらすべての日系人に対する攻撃は続けられた。人種(同化至難)、国民性(領土拡張欲、帝国主義者、好戦日本)、生活様式(不可解・非アメリカ的)、気質(内気・貧欲・不正直)、性行為(子沢山)そのほか、感情に訴え得るすべてのことを根拠に日系人攻撃が行なわれた。²⁰⁾

またロジャー・ダニエルは、次のように述べている。

中国人と日本人に対する敵意は、まず労働組合の綱領にあらわれたが、反東洋主義は、1870年来ずっと、すべてのサンフランシスコの政党の基本的政策綱領であった。²¹⁾ (論者訳)

光太郎の述べた排日の実体の輪郭を、以上の記述でほぼつかみ得たと同時に、彼自身も、この偏見の中で〈ジャップと言った奴をすぐやっつけ²²⁾〉ことがあっても、〈社会的に弱小な1ジャップとして²³⁾〉ニューヨークの底辺に生きなければならなかったのである。アメリカの日系1世あるいは2世は、彼らの

受けてきた蔑称が、〈奇妙な背の低い連中〉とか〈目のつり上ったヤツ〉とか、あるいは〈Skibbee〉〈Yellow Belly〉〈Green Guts〉であったことを隠そうとはしていない。

「根付の国」を貫流しているムード、特に冒頭2行は、私には、あの排日運動において、白人たちが描いた日本人に対する偏見の戯画そのものが、光太郎によって再生されたように思われてならない。つまり、「根付の国」には、WASP社会が日本人に抱いた偏見のイメージと、アメリカ社会の汚濁の衝で、ジャップと軽蔑されてこぶしを振り上げた高村光太郎の内面が凝縮されている、と私は思う。

〔3〕

〈シカゴ発、3月6日、サウスダコタ州ブラックヒルズの巨大なラッシュモア山記念碑の彫刻家ガトソン・ボーグラムは、ヘンロテイン病院に2月13日以来患者として入院していたが、本日心臓発作のため死亡した。69才であった〉²⁴（論者訳）と、アメリカの新聞は、ワシントン、ジェファソン、リンカーン、セオドア・ルーズベルトを山壁に彫ったアメリカの彫刻家ガトソン・ボーグラムの死亡記事を、かなりの紙幅を割いて、しかも写真入りで報じた。この山岳彫刻は、現在航空会社の広告として我々の目に触れている。しかし、この彫刻家が、どんな人間で、彼と高村光太郎との間に、どんなドラマが展開したかを知る人はほとんどいない。

明治39年4月に高村光太郎がボーグラムに宛てた書簡が、北川太一氏によって紹介された。²⁵ たどたどしい、バイブルイングリッシュで、ボーグラムに強引に雇ってくれるよう懇願している。なりふり構わず、給金はいくらでもよいからと訴えるような内容なのである。

美術学校を出てから始めてアメリカへ行った時、私はニューヨークの彫刻家ガトソン・ボーグラムといふ人の工場で、1週6弗の薄給で助手として働いた。〈中略〉無理に頼んで雇って貰ったのであるから薄給につい

て文句を言ふどころではなかった。²⁶

高村光太郎は、このように述懐し、くアメリカの繁華な都の激しい生活の中で、どう食を求めて、どう勉強したらいいか、まるで解らなかつた²⁷ためにく不安なおどおどした心に悩みきつてゐた時運よく私は此のアメリカに珍らしい彫刻家ガトソン・ボーグラム氏の處へ助手として働く事になつた²⁸と述べている。

しかしながら、高村光太郎がボーグラムに手紙を送つたのは、金のためばかりではない。

美術館で見たボーグラムという人の彫刻がよかつたから熱心な手紙を書いてね。

と、あの高見順との対談²⁹で述べている。美術館というのは、現在のメトロポリタン博物館のことである。現在メトロポリタンには、ボーグラムの作品は所蔵されていないが、彼の写真版集³⁰によると、かつてのメトロポリタンには、彼のブロンズ彫像がいくつか所蔵されていたことが明記されているので、高村光太郎がそこでボーグラムの作品に接したことは確かである。

私はどうも此国の彫刻が好きでなかつたので、マクモニーなどといふ人の新しい作風のものを見ると却て気持が悪かつた。すると青味がかつた大変いい色のついた鍍金の大きな群馬の狂奔してゐる彫刻が目についた。一番先の獐猛な馬の首に逞ましい裸の人間が飛びついてゐた。全体の構図が三角形で、非常に激しい動きが私の心をゆすぶつた。何だろうと思つて、題を見ると、「デオメデスの牝馬」とあつて、ガトソン・ボーグラム氏の作であつた。³¹

ここに述べられている「デオメデスの牝馬」は、次のような制作背景をもつ作品であることがわかる。

…………ガトソンは1904年にセントルイスで開かれた世界博覧会の出展準備に全身全霊を投入していた。ガトソンの作品「抵抗」は、狂奔して走る野生馬の群れの一部であつた。先頭の馬の背に身体を曲げた、瘦身の

裸体の騎手が一方の腕をだらりと下げ、もう一方を接近する1頭の馬の歯を防いでいるかのように乗っている。〈中略〉彼は、狂奔する馬の群れを導く無法者あるいはインディアンを描いたのであった。しかし、騎手の着衣を剥いでしまった。なぜならそれが邪魔だったからである。彼は、スタジオに1人の訪問者が訪れたとき、そのブロンズに「狂奔」と命名するところであったが彼が、その像に用いられる名前に気づかずに「なんとこのデオメデスの馬の肖像は壮大なんだろう」と述べたので、ガトソンは、「君が今これに命名してくれた」と言った。そしてその作品は「デオメデスの牝馬」となった。³²⁾ (論者訳)

長々と引用したが、高村光太郎が〈非常に激しい動きが私の心をゆすぶった〉と述べたボーグラムの作品は、まず彼の心裡に「抵抗」として浮び上がった心象を具体化したものであった。これを見た高村光太郎は、〈此人喰ひ馬の彫刻家は屹度自分を助手にしてくれると行也思った³³⁾〉と述べているが、〈内ものを豊富に持ってゐる³⁴⁾〉たボーグラムが、高村光太郎の内面を射すくめたような感がする。

光太郎は、〈「牝馬」の外に「ラスキン」³⁵⁾〉に感動し、また〈1尺に満たない「ネロ」の像には人間の野獣性が遺憾なく出てゐた³⁶⁾〉とも述べ、そして〈私を殊に動かした作は、私の居た頃作り始めた「胚胎」といふ女の裸体像であった³⁷⁾〉と、まぎれもなく、ボーグラムから受けた芸術的感動を吐露している。つまり、光太郎はアメリカにおいても芸術によって激しく^つき^動か^されたのである。

アメリカ時代の光太郎をこのようにまで感動された「胚胎」とは、どんな作品なのだろうか。

メトロポリタンから発行されている「ミュージアム・シリーズ」³⁸⁾によれば、その中に、

1. Wonderment of Motherhood
2. Conception the awakening to Motherhood
3. The Atlas

4. One of the cherubs

と題する作品が紹介されている。光太郎の言う「胚胎」とは、当然2に相当する。光太郎の訳語を借りて日本語になおせば、「胚胎—母性のめざめ」とでもなるであろう。この作品については、アメリカの美術評論家ジョージ・ルークスは、次のように述べている。

私は「胚胎」と呼ばれる像の前に立ち止まる。それは女性の、強靱で真実な貞節で美しいイメージを表わしている。ここには知性の墮落も、妄想も入りこまない。神が与えた自然の美への従順な線があるだけである。主権者のすべての崇高さをもって、われわれはここに人生のシンボルズムを見る。愛と慈しみ、献身と憐愍のそれをである。³⁹⁾(論者訳)

あの『ガトソン・ボーグラムコレクション』によれば、この作品の構図は、裸婦が両手で大胆に両乳房を下からぎゅっと握りしめ、顔をやや上向き加減にしている立像である。

高村豊周が、く当時としては日本の彫刻界では……前例がなかった。おそらく画期的なものであろう⁴⁰⁾と述べる「うつぶせの裸婦」を制作し「兄は自分の成績としてこの写真を翌年渡米の時携行した⁴¹⁾」ことを明らかにしているが、ボーグラムの彫刻の中に「熱気が封じられてある」と見てとった彼が、自身の「うつぶせの裸婦」の創作モチーフとボーグラムの「胚胎」との間に、互いにひびき合うものがあることを芸術家独得の招霊術で感じとったのではなかったか。

ガトソン・ボーグラムとはどんな人物だったのだろうか。ここで、それを述べる時間はない。ただ、高村光太郎に関係のある2、3のことだけを紹介するにとどめよう。

偉才ロダンの交友の1人として数年間過した後で、つまりロダン自身、後に彼の後継者と呼んだ教え子として過した後で、ボーグラムは、ほとんどの時間を彫刻にあてはじめた。⁴²⁾(論者訳)

と紹介したのは、あるボーグラムの傳記の一節である。これによれば、ロダ

ン自身も〈アメリカのもっとも偉大な彫刻家〉と称したという。光太郎がロダンを知ったのは、明治36年（1903）、21才の年であり、翌年には雑誌『ステュディオ』で、ロダンの「考える人」の写真を見て、魂を根底から揺さぶられたと後に述べている。⁴³

高村光太郎は、少なくともロダンの制作哲学である〈見たまま〉を作る精神を、アメリカにおいて、まずボーグラムの作品を通して実感できただけでなく、光太郎のロダン理解のもう1つのルートとしてボーグラムを通じてのそれを想定してもよいのではないか。これは、彼とガトソン・ボーグラムの邂逅の中の興味あるドラマの1つであろう。

ボーグラムが、高村光太郎を受け入れる以前に、2つの大きな事件があった。⁴⁴ 1つは、アメリカ美術界の腐敗を打破しようと、全国彫刻家協会の会長ジョン・クレンシー、アダムズ・ワードと論争をし、美術関係諸団体と激しくやり合っていたことである。この論争の中で、彼はあらゆるコンペティションに不明朗さがつきまとい、またアメリカ美術界の現状が、いかに若い美術学生の機会を奪っているかを激しく指弾している。今1つの事件は、ベルmont 礼拝堂事件である。これは光太郎がボーグラムのところで働く前年、即ち1905年（明治38）に起っている。ニューヨーク市の聖ヨハネ会堂のうちの1つ、ベルmont 礼拝堂のために彼が依頼された天使ガブリエルと天使ミカエルの彫像について批評家があまりにもこれらの天使が女性的だと非難したことに端を発する。アメリカ中の新聞が、この異常な論争に紙幅を割いたといっ

てよい。

この2つの事件は、ガトソン・ボーグラムという彫刻家のアメリカにおける位置の不確かさと、アメリカ美術界の後進性と苦闘する覚醒された芸術家の精神を示している。それはまた同時に、東洋から来た貧寒な1学生を受け入れる素地にもなり得ている。彼の伝記は、次のように述べている。

彼の仕事を賞賛して熟視する美術学生の着実な流れが常にあった。彼はまた、学生たちの質問に辛抱強く答えていた。時折彼は、スタジオ助手

として学生が働くのを許し、そのお返しに、学生たちの作品を批評した。この機会を与えられた学生たちは、彼らがしばしば親しく呼びならしていた、暖かい友情のこもった“ボギー”の指導を受けた経験を決して忘れなかった。⁴⁵ (論者訳)

高村光太郎が、ボーグラムのスタジオに助手として受け入れられた時期は、ボーグラムの芸術家としての「抵抗」——それはまさに狂奔の時期でもあった。光太郎が、〈熱気が封じられてある〉と感じたのは、至極当然のことであったのかも知れない。

上述した高見順との対談で、光太郎は次のように述べている。

ボーグラムさんの家へ入ったのが、学校の勉強よりよかったですな。その人の1日の生活がわかるでしょう。大体向うの美術家が、どういう生活をやってるかもわかる。私的の交際から社会への関係すべての生活ですね。家の中にどんなのがあって、どういうふうに使って仕事するんだか。学校じゃ、ただ粘土こねて、モデル写生するだけでしょう。そこへいくとね、色付けの薬からどういうふうにして色を付けるか、どういうふうにしてこねるか、どういうふうにして運搬屋に渡すか、彫刻の芯はどういうふうは何んでこさえるか、あらゆることが見えて判っちゃうもんですからね。〈中略〉、学校でのんきにやっていた人より、ずっとおぼえたんです。ぼくは色付けなんかうまかったけれど、それはボーグラムさんの使ってた薬を、みんな筆記して来ちゃったんですよ。色付け、手伝うでしょ。そうすると、ガスで焼いて、先生が、薬塗って、あと磨け、なんて言われて、そんなことやってたんで、おぼえたんです。学校にいたんじゃ、そんなこと判らない。⁴⁶

〈最も多くロダンに感化された彫刻家⁴⁷〉と光太郎自身も述べているガトソン・ボーグラムは、自分の俸給——それは高村光太郎の通学していた夜学、アートスチューデント・リーグより教師として得ていたものだが、それをすべて賞与として提供して苦学生生活を強いられている光太郎を助けた人でもあった。

ボーグラムとの邂逅をふくめて、高村光太郎におけるアメリカを、かいつまんで述べて来たが、彼のアメリカ体験を熟視する視点が高村光太郎の詩業全体を見るための視点であらねばならないことはいうまでもないことである。

私は、高村光太郎のかつて住んだニューヨーク市のブロードウェイ通りや五番街通りに面した「おみやげ店」に、根付を売らない店はないというほど、この小さな彫刻が店頭に山積みされていた事実を、どうしても忘れることはできない。

注(1) 伊藤信吉『高村光太郎研究』思潮社・89頁

(2) 分銅惇作「詩集論道程」(『国文学解釈と教材の研究』昭和48年11月号所収)

(3) 吉田精一編著『高村光太郎の人間と芸術』(教育出版センター) 所収剣持武彦「高村光太郎に於ける西洋」、杉本春生「高村光太郎における西洋」(『国文学解釈と教材の研究』昭和48年11月号所収) 等を参照

(4) 『ユリイカ』1972年7月号所収の北川太一氏の年譜による。

(5) 『父との関係——アトリエにて2・3・4——』(『現代日本文学大系27』筑摩書房)

(6) 同 上

(7) 同 上

(8) Yamato Ichihashi "Japanese in the United States"(Stanford University Press. 1932)

(9) (ビル・ホソカワ、井上勇訳『二世——このおとなしいアメリカ人——』時事通信社)

(10) 首藤基澄「内と外——光太郎・その精神の核」(『国文学解釈と鑑賞』1976年5月号)

(11) 安藤靖彦「光太郎・そのアメリカ」(『国語と国文学』(昭和45年1月号) は、〈光太郎の自我覚醒はたとえば不徹底な形であるにしろすでに渡米以前からあつて、それが〈渡米後一段とはっきりする『明星』調へのイロニックな反応ひいては「敗鬨録」その他に見られる長詩の試みへとつづく〉と述べ、首藤基澄『高村光太郎』(昭和41年、神無書房)の自我の覚醒が渡米以後のことに属するという説を批判、それに対して、首藤基澄「道程論——前期の解釈を中心に——」(『高村光太郎の人間と芸術』吉田 精一編著、教育出版センター)の再批判がある。

(12) (9)と同じ

(13) これらの統計は、「Industrial Commission Reports Vol. XV」による。

- (14) (9)と同じ
- (15) 同上
- (16) "Japanese American History Project" UCLA. chapt. "Study in Progress"
- (17) 【布哇国政府ト同国我国移人トノ契約書】(内閣文庫蔵)
- (18) "Commissioner General of Immigration: Annual Report" 1901—1924, Adapted from Roger Daniels, "The Politics of Prejudice" University of California Publications in History Vol. LXXI
- (19) Sanfrancisco Bulletin July 22, 1906.
- (20) H・H・Lキタノ著、内崎以佐味訳【アメリカのなかの日本人】東洋経済新報社
- (21) Roger Daniels, "The Politics of Prejudice" University of California Publications in History Vol. LXXI
- (22) 「わが生涯」(『現代日本文学大系27』筑摩書房)
- (23) (5)と同じ
- (24) New York Herald Tribune, March 7, 1941.
- (25) 【国文学解釈と鑑賞】1976年5月号。
- (26) 【光太郎遺珠】(「ヘルプの生活」)
- (27) 「アメリカの彫刻家ガッソン・ボーグラム氏」(『新潮』大正6年6月号)
- (28) 同上
- (29) 不詳
- (30) "Gutzon Borglum Collection" (アメリカ議会図書館蔵)
- (31) (27)と同じ
- (32) "Gutzon Borglum——Artist and Patriot——" Willadene Price, Rand McNally & Company, Chicago, New York. Sanfrancisco.
- (33) (27)と同じ
- (34) 同上
- (35) 同上
- (36) 同上
- (37) 同上
- (38) "Museum Series" March, 1940.
- (39) A pamphlet filled "Gutzon Borglum" by George Luks, New York, February 17, 1914.
- (40) 高村豊周【定本光太郎回想】
- (41) 同上

- (42) "Brief Sketch of Gutzon Borglum" issued by Adam Dingwall, 50W.
47 st. New York, 1921.
- (43) 高村光太郎『オオギュスト・ロダン』
- (44) (32)より
- (46) (22)と同じ
- (47) (27)と同じ